確立してしまっている感がある。しかし大嶋仁「『道草』における作者と主人公の関係」（『講座夏目漱石』第四巻　S57・2　有斐閣）では、「作者と主人公」は「融合から分離へ、分離から融合へと、その関係は目まぐるしく変化している」ことを、マクレランの英訳文と比較分析することを通じて指摘している。

英語圏と日本との文化の相違その他の問題もあるだろうが、この論文は、それまでの『道草』論の画一的な展開に一石を投ずる問題を含んでいるのではないだろうか。

それを受けて、今発表では、『道草』の文体、表現効果について考察していきたい。

《中国学》

『駱駝祥子』をめぐって

博士後期課程　二年　花城可裕

老舎の代表作である『駱駝祥子』はこれまで他の作家の他の作品同様、社会主義リアリズムの文芸理論を図式的に運用することで論ぜられてきた憾みがある。今日においてもまだその旧套を脱していない嫌いがあるのみならず、政治的な制約を受けることのないわが国においてもまたその傾向があることは否めない。しかしながら、社会主義リアリズムの文芸理論は数ある評価基準の一つに過ぎない。ある特定の「主義」に拠って作品を語るのではなく、作品中に存在する「問題」をこそ研究するべきであろう。「祥子は何故『革命』しないのか」などと言っても詮方のないことである。

さて、老舎は『駱駝祥子』において、非常に判りやすいかたちで、「病める社会」の批判と「個人主義」の批判をしている。そしてこの二つの批判こそがこの小説の主題であることは異論のないところである。しかしながら、一見自明のことに見えるためか、ここで老舎が用いている「個人主義」なる語の意味が十全に論ぜられたことはない。ために、老舎がこの所謂「個人主義」を批判することで何を主張しているかは未だ不明瞭のままである。本発表はこの問題を端緒として『駱駝祥子』の主題をめぐる二、三の問題を考察してこの小説の新解釈を試みようとするものである。

今年は恰度、『駱駝祥子』問世六十周年の歳に当たっている。この発表が一つの切っ掛けとなって、「華甲」を迎えた『駱駝祥子』が、これまでの硬直した読まれ方を脱して新たな生命を得ることができたならば、と思う。

中国近世における博文約礼解と知行論

東洋学研究所副手　中根公雄

「博文・約礼」はもとより『論語』の語であるが、朱熹は『集注』で、「君子の学は其の博からんことを欲す、故に文に於て考へざること無し。守るに其の要なるを欲す、故に其の動くに必ず礼を以てす」（雍也篇）、「博文約礼は教の序なり。言ふこころは夫子の道は高妙と雖も、人に教ふるに序有るなり」（子罕篇）と解釈して、実際的に学による知識の獲得と礼による知識のひきしめという、具体的な知や功夫の段階を主張する。更に侯仲良の語を用いて「我を博むるに文

を以てすとは、致知格物なり。我を約するに礼を以てすとは、克己復礼なり」（子罕篇）と解釈するに至っては、自己の修養論として知行論に先後関係をみていることになる。これに対して王守仁は『伝習録』で、「博は是れ約の功なり」「這れ便ち是れ博く之を文に学ぶなり、便ち是れ約礼の功夫なり」（巻上、徐愛録）と言う。一見すると博文から約礼への段階的な考え方が示されているようであるが、『文録』に「博文して以て約礼し、物を格して以て其の良知を致すは一なり。故に先後の説は後儒の支繆の見なり」（博約説）と、知行論の問題として意識しながら、博文と約礼の一体性を説いている。更に虚文・虚礼を排除する思考態度を併せみるとき、王守仁の功夫論は実地の行動規範となるのである。

以上、朱熹的解釈と王守仁的思索との異同を比較検討しながら、博文約礼解と知行論が如何に展開されたのかを考察してみる。